慶應義塾大学教養研究センター Report 開かれゆくキャンパス 4

「21世紀の商店街Ⅱ」

シンポジウムの開催に思う

経済学部教授 小潟昭夫

日吉という地域は、大学と商店街が東横線によって分断されています。 電車のホームに下りて改札口を通ると、一目散に銀杏並木に向かう学生 も少なくありません。知的空間としての日吉キャンパスと、遊んだり食 事をしたりビデオを借りたりする生活空間として商店街が二極分解して いるのが、日吉の特徴です。

私が教養研究センターの交流連携セクションに所属したときに真っ先に考えたことは、知と遊の融合すなわち慶應義塾大学と日吉商店街との交流連携でした。来往舎ができる数年前から、大学と商店街や町内会の代表者の方々と、年に1度七夕のように会合を持ち、地域の人たちの要望を聞くといったことがありました。しかし、それは発火点にこそなりましたが、燃え上がるというのには、ほど遠い交流でした。

そんなときに、商学部の設置講座「社会との対話」で、日吉商店街協同組合にインターンシップを行う学生があらわれ、様々な問題点を指摘した興味深いレポートがなされました。ほぼ同じ時期に経済学部の「自由研究セミナー」の学生が、日吉商店街と大学と塾生が三位一体となって、地域活性化のために 花火と音楽の融合 イベントを行いたいと言ってきました。田上竜也助教授が商店街協同組合の専務理事の熊井憲一さんにお話ししてくださり、そこからヒヨシエイジ 2003 が実現したのです。

教養研究センターの交流連携セクションのメンバーである、田上竜也助教授を中心に、経済学部の石井明助教授と私、それに三田から商学部の牛島利明助教授を加えて、2004年には、商学部設置科目総合教育セミナー「21世紀の商店街」が立ち上げられました。60数名の応募者がありましたが、20数名に絞り込み、4グループにして4人の教員がそれぞれ担当しました。2005年も同じ方式で行い、この日の発表会になったのです。ひとつの問題をグループで討論し、役割分担を決め、実際に調査研究や実践を行い、最後に論文に纏め、発表するという実学の府・慶應義塾にふさわしい授業になりました。

今回パネリストとして迎えた中野勝久さんは日吉の隣町である元住吉のオズ通り商店街から、また富岡淳さんは港北区役所から、そして宮木いっぺいさんは法政大学地域研究センターから、それぞれ地域・行政・大学の代表として来られました。パネリストの一人、法政大学専担助教授になられた宮木いっぺい君は、20数年前、私の生徒でした。当時、彼と、1年後輩だった牛島利明君とで、渋谷から六本木・麻布方向へ街歩きをしたことが懐かしく思い出されます。「三つ子の魂百までも」ではありませんが、20年後の今、原点に帰還したようで不思議な想いです。そして教養教育の成果は長いスパンで現れるものと確信する次第です。学生の皆さんの1年間の活動が、人間関係も含めて、血となり肉となって、やがて10年後、20年後に甦ってくるでありましょう。

第1部 学生の視点と発想による地域活性化への提言

前年度の第1回シンポジウムと同じく、今回も前半部は担当教員毎に4グループに分かれた学生発表および質疑応答によって進められました。発表はそれぞれ1、2名のプレゼンテーターにより、約15分の枠で行われました。質疑応答では商店街の方々や行政関係者から、掘り下げの甘さや言葉の用法に関し厳しいご指摘も寄せられ、学生にも教員にも勉強することの多い場となりました。以下に掲載するのは、基本的に学生の作成による発表要旨です。

石井班発表

「商店街が生き残るために」

現在商店街を取り巻く環境は大きく変化し、環境に対応しきれず衰退せざるを得ない商店街も数多くある。石井班では全国5つの商店街を実態調査し、衰退の原因と生き残り戦略を研究した。

5つの商店街のうち、浜松中心商店街と岐阜市柳ヶ岳商店街は時代の変化についていけず、衰退傾向にある。浜松中心商店街が衰退してしまった主な要因は、郊外型大規模小売店が次々に進出し客を奪われたことと、中心地の百貨店、デパートの撤退、倒産によって、それまでの客の流れ、回遊性が失われたことである。また岐阜市柳ヶ瀬商店街の主な衰退要因は、近隣の百貨店や大型スーパーの撤退による中心市街地の急速な空洞化、路面電車の廃線、郊外に大規模ショッピングセンターが相次いで出店していること、名古屋駅に高島屋が開業し客を奪われていることである。

一方、残り3つの商店街は活性化に成功した例である。 千葉県のJR 柏駅東口前にある柏二番街は県内屈指の活気 ある商店街であり、全蓋式アーケードの設置や、行政を 巻き込み官民一体で若者をターゲットとしたイベントを 行いイメージアップを推し進めたことが現在の成功に繋 がっている。大阪府東住吉区にある駒川商店街は、「地域 住民とのふれあいのある街」をコンセプトとする地域密 着の商店街活性化活動を積極的に展開しており、コミュ ニティーホールの設置、駒川祭りの開催、セレッソ大阪 や阪神タイガースの支援など、消費者のニーズにかなっ た事業を数多く実行に移す対応力を備えている。東急東 横線元住吉駅西側のモトスミ・ブレーメン通り商店街は、 友好関係を結ぶドイツのブレーメン州ロイドパサージュ 商店街から環境対策のノウハウを学び、日本初の環境対 策に取り組む商店街となった。空き缶の回収機の設置と 販売事業のドッキングや、業績不振の商店に土地の売却を奨励し、実績のある店を呼び込むことで集客力の維持に成功している。

結論として商店街が生き残るために必要なのは「商店街の団結」である。団結し全体で発展に尽力すれば、商店街は時代の変化に柔軟に対応できるばかりか、商店街を取り込む街全体の改革の中心的な役割を担うことができるだろう。

田上班発表 「行政と商店街」

われわれは商店街と行政の関係をテーマとし、古くからある商店街が、あらたな都市計画やそれを主導する地方自治体の行政と、どう上手に関わっていけば生き残っていけるかを考究した。具体例として横浜市の野毛・伊勢佐木・元町を扱ったが、これらの商店街はいずれも、横浜市主導の埋立地のまちづくり計画「MM(みなとみらい)21」に隣接し、行政に大きな影響を受けていること、さらにお互い至近距離に位置しながら独自の歴史と個性を有していることが、このサンプリングの理由である。

具体的に見ていくと、闇市から発展し飲食店を中心と して形成された野毛商店街は、MM21の開発や東急東横 線桜木町駅の廃止により衰退傾向にある。現在は横浜市 の市街地開発事業の一環として「街づくり協議地区」に 指定され、また横浜商工会議所が設置する「中心市街地(関 内・関外地区)TMO構想」のもとで活性化が図られている。 われわれは野毛の歴史的イメージを継承しつつ新規事業 者を呼び込むための「商店街ファンド」の創設と、不動 産の流動化手法を用いた「開発型流動化案件」としての 再開発を提言する。伊勢佐木商店街は映画館や百貨店を 核にした歓楽街としての歴史をもつが、周辺地域の開発 により客数に陰りが見える。行政の支援を受けてモール 化をはじめとするバリアフリー事業を進めてきたが、提 言としては、地元客を意識したヴィジョンづくりと、商 店街店舗による宅配サービスなど地域に根ざした事業の 強化が挙げられる。元町商店街は横浜開港以来、山手旧 居留地を後背地としたファッショナブルな街として繁栄 してきた。現在も商店街の能動的な発意によって、まち づくり協定や地区計画が定められ、道路整備やコミュニ ティアイデンティティの確立、共同配送システムが実施 されるなど、理想的な運営がなされている。われわれは 現状を補うものとして、男性客を対象とした店を増やす

ことや、店舗検索システムの導入を提言する。

これら3つの商店街を調査した結論として、行政に支援を求めるうえでも、あくまで商店街が主体となって個性を創出していくことが重要といえる。ハード面では個々の歴史を背景とした都市計画や町並み保存、ソフト面では自主性とモチベーションの高さに裏打ちされたシステム作りが必要である。

小潟班発表

「ヒヨシエイジ 2005 学生出店プロジェクト」

私たち小潟班は今回のシンポジウムで、実際に担当 したヒヨシエイジ 2005 での学生出店プロジェクトを 中心に発表した。この出店ではファンド形式を採用し たが、その理由としては擬似的にではあれ実際的な企 業運営を体験すること、そして預かった資金という意 識によって野放図な経営に歯止めをかけることがある。 今回は天候不順の影響で仕入れを大幅に減らしたため、 - 口 2,000 円× 29 口で 58,000 円を集めた時点で早期打ち 切りとした。リスクマネジメントについては、リスクファ クターをアップサイドリスク、ダウンサイドリスクのふ たつに分け、それぞれ対処した。たとえば、当日天候が 崩れる心配があったため、直前になってメニューを減ら したり全体仕入れ量を減らした、しかし天候が回復し予 想以上に売り上げが増えた場合の追加仕入れ先を確保し ておく、などである。結局学生出店プロジェクトは純利 益 15,357 円を出し、ファンド出資者には一口あたり 185 円を還元することができた。

エイジフェスタも無事に終わり、当初定めたふたつの 目標、すなわち「商業学の学習・実践」と「地域との交流」 の達成度について振り返ってみた。まず「商業学の学習・ 実践」については商業学における 4P・4C の視点から考え、 反省点をレポートにまとめた。4Pとは製品 (Product)、価 格 (Price)、プロモーション (Promotion)、流通 (Place) であ り、それぞれ 4C の顧客価値 (Customer value)、顧客コスト (Customer cost)、コミュニケーション (Communication)、利 便性 (Convenience) に対応する。一方「地域との交流」に ついては、ヒヨシエイジを通じてキャンパス内に多くの 日吉住民の方々が来訪し、販売を通じてコミュニケーショ ンを図ることができた。しかしこのコミュニケーション は一対一のミクロ的なコミュニケーションであって全体 と全体との間にあるマクロ的なコミュニケーションには まだ成長していないと感じた。これについてはヒヨシエ イジも出店プロジェクトもともに 10年スパンで考え、継 続して行い、より高位のマクロ的コミュニケーションに 発展させることが重要と考える。

牛島班発表

「商店街の「ウチ」と「ソト」――日吉商店街への期待」

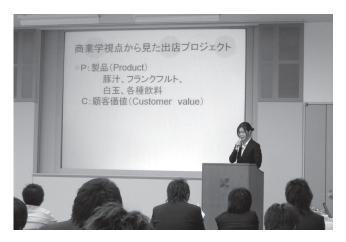
私たちは、日頃通っている日吉の商店街のあり方について、商店街の「ソト」と「ウチ」のふたつの視点から考察した。

まず商店街の「ソト」に位置する慶應義塾大学との関係のあり方を見ると、現状として慶應大学が日吉商店街に対して行っている地域貢献的取り組みは、関西学院大学や岐阜経済大学など他大学に比べ不十分といえる。当セミナーや「ヒヨシエイジ」を出発点に、また湘南藤沢キャンパスの学生が行っている「モバイルによる商店活性化プロジェクト」も参考にしながら、さらなる活動を進めていく必要がある。

もうひとつの「ソト」からの視点として商店街と顧客の関係を考察し、顧客としては特にこの地域に通う学生と、地域住民を取り上げた。学生にとって商店街は異なる世代との交流の場という性格を持つが、経済的・非経済的交流の促進により街の活性化が期待できる。そのためにはイベント実施などで学生に来街の動機付けを行い、商店街の認知度を高める努力が必要である。いっぽう地域住民との関係については、その一層の利用を促すために、日吉商店街の立地を生かすことと、駅前の東急百貨店利用客を巻き込む工夫が必要である。

一方、商店街の「ウチ」として、商店街の組織問題を取り上げた。組織強化の改善案を、資金・人材の確保、それらの効率的な利用、まとまった小さな組織からの波及という3つの視点から考えた。つまり、商店街組合への加盟数の増加、商店街組織の一本化、通り会を利用した商店街の一体化についての提案である。これらすべての基盤として必要なのは、情報共有による意思疎通である。

このように日吉商店街を取り巻く環境を「ウチ」と「ソト」に分けて考えたが、日吉商店街のさらなる発展のために、まず「ウチ」にある組織問題を解決することが望まれる。



第2部 パネルディスカッション:大学・地域・行政の連携-その現状と課題

牛島 本日の司会を務めさせていただきます商学部の牛島です。よろしくお願いいたします。

本日は元住吉のオズ通り商店街にて慶應義塾大学のサークル「ピース・プロダクション」と共同してボランティア活動をされています中野さん、港北区の区政推進課企画調整係長の富岡さん、大学で教育を通じて地域で活動をされています法政大学地域研究センターの宮木さんからお話を伺います。

まず、それぞれの活動をご紹介いただきます。

オズ通り商店街の活動



中野勝久氏

受けてくれることに決まりました。

また、平成 15 年の 2 月頃に川崎市と中小企業診断士で もあり、慶應義塾大学の卒業生でもある方の協力を得て コミュニティ施設「街なかボランティア・ピース」を開 場しました。

最初はいろいろなことをやろうと思っていましたが、一方で何もできないのではないかという不安もありました。ですが、学生の協力があり、まずは街中の掃除に取り組みました。この他には現在、活動の中心となっている寺子屋があります。寺子屋では、大学生が小学生を相手に毎週土曜日の午後2時から午後4時まで無料で、勉強を教えたり、一緒に遊んだりとにぎやかに取り組んでいます。現在は、この寺子屋に加えて託児所にも取り組んでいます。これは偶然にも寺子屋で借りた場所が昼間空いたので、そこで保育士さんにお願いして、託児所を開いています。

また、商店街のイベントを企画から運営まですべて学 生と一緒にやっています。 私たちがなぜボランティアサークルという形態をとったのかと言いますと、ボランティアであれば介護から防災まで幅広くできるのです。

ただし、ボランティアは利益を取らない活動です。一方の商店街はどうしても利益追求型になってしまいますのでボランティア活動を商店街とどのように関連づけるかが課題です。検討事項はまだまだありますが、私たちは、こうした活動を通じてコミュニティからコミュニケーションを生みたいと思っております。

港北区政推進課としての試み

富岡 港北区役所の区政推進課企画調整係長をしております富岡と申します。港北役所では、「港北ふるさとサポート事業」という事業を始めました。これは、地域の課題を解決したり、町の魅力づくりを積極的に取り組もうと考えたりしていらっしゃる区民のグループの方々に助成を行う事業です。

ただし、補助金だけでは短期的なものになりますので、それにとどまらない付加価値を加えています。たとえば、これから何か始めたいと思っている方たちの活動のスタートアップをお手伝いしたり、価値のある活動をたたえたり、自治会、町内会、NPO、任意団体、大学のサークルなど多くの団体同士の交流や連携を促したりしています。

現在、この事業に慶應義塾大学からは2グループが応募いただきました。ひとつは「ヒヨシエイジ」です。また、もうひとつは、「日吉学生委員会」です。これら学生の活動が区民の間に広がることを願っています。

最後に、課題として考えられているものを簡単に挙げ ます。たとえば「ヒヨシエイジ」では 10 年スパンの活動



富岡 淳氏

開かれゆくキャンパス4「21世紀の商店街Ⅱ』

とができないものかと思っています。

法政大学地域研究センターの試み

宮木 法政大学地域研究 センターの宮木と申しま す。大学の地域・行政と の連携について私は主に ふたつの場で関わってい ます。

ひとつは、私が所属している法政大学地域研究センターです。昨今、既成の学問分野を越えて「地域」というくくりで考えなければならない問



宮木いっぺい氏

題が急増しています。地域研究センターは、それらの問題に取り組むために、法政大学の全学部から教員スタッフが集まってできたセンターです。

センターの具体的な活動のひとつに中小企業支援があります。まず、契約関係にある自治体を通して中小企業から経営上の問題などさまざまな相談が寄せられます。内容にあわせて学内の教員から担当スタッフを選定します。そして、担当スタッフが研究員、院生などからなるプロジェクトチームを作り、コンサルティングを行うという仕組みです。その他、まちづくり支援、NPO支援、出前シンポジウムの開催なども行っています。私はそこでコーディネーター役をつとめています。

もうひとつは、現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域の中小企業活性化と実践的体験教育」という教育プログラムの場です。これは「中小企業が学生を育てる、学生が地域を元気にする」プログラム、企業と話して企画を提案する実習授業です。企業、NPO、自治体とのコラボレーションが中心で、たとえばものづくりの場合、マーケティングを学生が担当したり、新商品のアイディアを出し企画会議に参加して実際に商品化までいった例もあります。全部で7つの学部の学生が参加する公開科目で、私はそこで担当教員としてコーディネーターの役割を担っています。

ディスカッション

牛島 ありがとうございました。それでは、まず中野さん、 富岡さんより慶應義塾大学の学生と地域での活動に取り 組んでおられるご経験から今後、特に慶應大学もしくは 日吉キャンパスに対してどのようなことが期待されてい るのかお伺いしたいと思います。 中野 大学生と活動の一環で小学校へ行くことがありますが、そこの学校には学習障害の生徒いるらしいのです。たとえば、小学校からは放課後にでも、そのような生徒を対象に勉強の面倒を見てもらえないかという要望があがります。ですが、なかなか時間的にも地理的にも大学生をお誘いすることが難しいのです。ですから、「ボランティア時間」のようなものを大学で設けていただけますと子たちも、学生も助かるのではないかと思います。

富岡 中野さんのご発言と同様ですが、長期的に活動をしていくことを考えた場合には、たとえば授業の一環としていただいたり、パネル展などを日吉キャンパスで開催し、商店街の取り組みなどを紹介していただきたいと思います。管理面で慎重にお考えになるのは当然だとは思いますが、地域の方にこのキャンパスの素晴らしい資源を開放していただきたいと思います。

牛島 どうもありがとうございます。それでは、先端的な取り組みをされており、これから慶應義塾大学が直面するであろう課題についても先行して考えられているであろう宮木さんにお話しをうかがいたいと思います。

宮木 中野さん、富岡さんのお話は後継者問題ともかかわる重要な問題です。私は、継続性を生むためには人間関係をどのように築いていくかが一番大事だと思います。お金の問題や仕組みの問題はあとからどうとでもなりますが、それよりもまずは人間関係を育む「場」がないといけません。企業、自治体、大学の文化の違いをどう乗り越えてゆくかということがとても大切で、その橋渡しが、そして橋渡しをするための人材(コーディネーター)がどうしても必要になります。残念ながら大学にはそういう人材はまだまだ少ないですし、育成する仕組みも十分でないというのが現状です。

私が商店街や中小企業の方々から聞く限りではいまだに大学は敷居が高いというイメージがあるみたいですね。そこでたとえば商店街の真ん中に、気軽に立ち寄れるサテライトオフィスを設けるだけで、そこが橋渡しの「場」として機能するようになると思います。地域研究センターの台東サテライトオフィスはそのようなネットワーク拠点として機能しています。

企業とのコラボレーション企画では、たとえばウェブ サイトを作ったり、企画会議に参加して学生が大きな成 果を出すことがあります。そういうとき、はじめは学生 の力、姿勢に対して半信半疑だった企業の方々がはじめ て本当の笑顔を見せてくださり、そこから本音のコミュ

開かれゆくキャンパス4「21世紀の商店街Ⅱ」

ニケーションがスタートします。お互い社交辞令ではない本当に役立つコラボレーションが進むと、企業の側では報酬を払いたくなるようですし、学生はやりがいを感じ逆に報酬など必要ないと考えるようになるみたいです。

牛島 それでは、学生を受け入れてくださっている中野さん、富岡さんの立場から見て学生は見返りがなくてもやりがいを感じて商店街や地域活動に取り組んでいるのでしょうか。

中野 私から見て、活動をされている学生に対価を与えるということは非常に失礼になるケースがあるのではないかと思います。お金やモノよりも活動を通じて子供たちから 笑顔をもらったり、周りの人から言葉をかけられたり、こうしたものが意欲の源となると思います。

富岡 「港北ふるさとサポート事業」では人件費は補助対象外ですが、良い取り組みは新聞やタウン誌に取り上げられ、いろいろな人から声を掛けられるようになります。それだけでもやりがいを感じてくださる方も少なくありませ

ん。学生の活動では、こうした点に価値を見い出していく ことが必要なのではないかと思いました。

また、地域での活動の中には行政から助成を受けているところもあると思いますが、活動の維持を念頭におくのであればボランティア以外にも、たとえばコミュニティー・ビジネスに発展させる方向を検討してもいいと思います。

牛島 各関係者の取り組みや継続性についてようやく問題 点やアイディアが出てきたところですが、これにてシンポジウムを締めさせていただきます。本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

PROFILE

司会 : 牛島利明 (慶應義塾大学商学部助教授) パネリスト:

富岡 淳(とみおか・あつし) 港北区区政推進課企画調整係長 中野勝久(なかの・かつひさ)

モトスミ・オズ通り商店街振興組合副理事長/事業部長 宮木いっぺい(みやき・いっぺい)

法政大学地域研究センター専担助教授 Global Network for Coexistence 代表

「21世紀の商店街Ⅱ」に参加して

「21世紀の商店街」シンポジウムに参加するたびに、 追体験をするような思いに駆られる。地元の日吉や元住 吉の商店街だけではない。去年の発表対象となった酒田 市の商店街や、今年の岐阜市の柳ヶ瀬商店街は、双方と も私にとってはなじみのある町であり、商店街である。 特に岐阜駅近くの柳ヶ瀬は、墓参のために何度も通る商 店街だ。コミュニティバス「柳バス」もよく使わせても らっていた。今回学生さんたちの発表に耳を傾けながら、 普段から感じていた柳ヶ瀬商店街に対する危惧をあらた めて自分の中で確認していたのである。同時にあの商店 街を動かしている人々の想いも発表を通して伝わってき た。柳ヶ瀬だけではない、JR 岐阜駅と名鉄新岐阜駅界 隈に軒を並べていた衣服・繊維問屋は次々と店をたたみ 始めている。2005年3月末にとうとう名鉄の市内線も 廃線となった。駅に降り立つと次第に募ってくる寂しさ は、ある意味で新しい都市開発も仕方ないのか、という 確信へと変わっていたが、去年の秋に訪れた時、柳ヶ瀬 に続くJR の北口駅前はすっかり空き地となり、これか ら大規模な工事が行われることを物語っていた。駅とそ の周辺の再開発はあらためて大きな影響を柳ヶ瀬に与え ることだろう。

横山千晶 (法学部教授・教養研究センター所長)

私の思いは複雑である。私にとって柳ヶ瀬は母や亡くなった父がその青春を過ごした場所だ。その意味で自分の生まれ育ったところではないにもかかわらず、思い出の場所なのである。商店街を通るだけで、私の存在と何かしらつながっているような気がしてならないのだ。町が変わるということは、どこかで思い出が失われていくことだ。商店街ももちろん生まれ変わる。そして生き続けていくためにはそうでなくてはならない。でもその過程を私よりももっと若い学生たちが私と共に見つめてくれることは何かを失うことへの救いとなっている。今回の学生さんがたの発表を聞きながら、ひとつひとつの発表で取り上げられる町と商店街に私と同じような気持ちを募らせている誰かが聴衆の中にいるのかもしれないと思う。このような形で商店街は私と学生と商店街に携わる人々と聴衆を結び付けているのだった。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.11 交流・連携セクション(担当:田上竜也)

> 2006 年 3 月 31 日発行 代表者 横山千晶 〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL: 045-563-1111 (代表) lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/